HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	病者としての自己像と霊的覚醒 ： W・ジェイムズの著作を手がかりに
Author(s)	堀, 雅彦
Citation	基督教學, 46, 35-39
Issue Date	2011-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47487
Type	journal article
File Information	SC46_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

う項目において「アブラハム宗教」と仏教・ヒンドゥー教が対置されて記述されている。また新宗教、エゾテリズム等は扱われておらず、取り上げられる宗教はいわゆる「世界宗教」のみである。

以上の学習指導要領の分析から、各宗教科においては他宗派・他宗教および現代的な宗教的潮流がすべて同等に扱われているわけではなく、差異化がはかられていることが読み取れる。その差異化は「近さ」と「疎遠さ」といった表現で示されている場合もあれば、対象となっている宗派・宗教が、そこから「学ぶ」ことのできる対象として描かれているか、あるいは批判的な「判断・評価」の対象として描かれているかによって示されている場合もある。また宗教科ごとにみていくと、他宗教・他宗派に対して最もラディカルな姿勢をとっているのが復古カトリックで、ロシア正教とユダヤ教宗教科では他宗派・他宗教に対する関心が薄いのが特徴的である。今後はさらにこうした他宗派・他宗教の位置づけが生まれた背景とその意図を考察しつつ、現代社会の宗教的現実の一断面を明らかにしていきたいと考えている。

研究発表要旨

病者としての自己像と霊的覚醒
―W・ジェイムズの著作を手がかりに―

堀　雅彦

病は身体的なものであれ、精神的なものであれ、通常は癒されるべきもの、除かれるべきものとして、その消極的・否定的な側面において語られることが多い。しかしながら、むしろ病に一定の積極的な意味を認める立場もありえよう。実際、私の目下の研究対象であるアメリカの哲学者、ウィリアム・ジェイムズ（一八四二―一九一〇）は次のように述べている。「病者（the morbid）は人生の意味について何らの啓示ももたらさないとか、いわゆる健やかな心の見方（the healthy minded view）が

すべてだなどと、誰に断言できようか」。ジェイムズにおいて、病（病むことと）と宗教的世界の開示とはいかなる関係にあったのか、以下、考えたい。

1　健康と病の間

ジェイムズは一八九六年に行ったロウエル講義において、およそ以下のような見解を示している。どんな症状もそれ自体で病的とは言えず、それが果たす役割が問題である。ある症状が「社会的に有用」と見なされる場合には、それは病的と見なされない。憑依は伝統的社会において一定の有用性を認められたものの、近代化の途上で邪悪視され、さらには病理化されたのである。

この講義の五年後に行われたギフォード講義（＝『宗教的経験の諸相』）では、彼は以下二つの水準において「病」を論じている。

A. 当時の医学的観点から「病」と見なされているもの。そのような「見なし」の相対性に彼が気づいていたことはすでに述べたとおりだが、『諸相』の彼は便宜上、医学の基準を少なくとも一面において受け入れている。

B. ジェイムズが「病める魂」と呼ぶ宗教的気質の一類型。万物の本質を善と見なす「健やかな心」とは対照的に、人生の本質は悪にある、と見ずにはいられない気質のことであり、この気質の持ち主がすべて医学的にみて病んでいるわけではない。

2　病の啓示性

『諸相』のジェイムズは次のように述べている。「宗教というものが退屈な習慣ではなく、むしろ激しい情熱であるような」人々は、しばしば「恍惚状態に陥って、声なき声を聞いたり、影なき影を見たりなどして、ふつう病理的なものの部類に入れられるあらゆる異常な特徴を示している」。

ここで言われている「病理」は先述のAの水準に属する。ただしジェイムズは、宗教者の「霊感」の由来を単に人間の気質に求めることには満足せず、「より高い領域」、あるいは「知覚可能な世界の表面の向こう側」からの働きかけを想定している。そのような「向こう側」

への覚醒を、ここでは広く「霊的覚醒」と呼ぶ。ジェイムズは病を霊的覚醒の唯一の根（起因）とは見ていないにせよ、霊感を受ける人間の側のかなり決定的な条件と見なしていたと言える。

ジェイムズによれば、病によってもたらされ、あるいは促進される覚醒は、単に知覚を越えた領域に対するもののみではない。病は時として、目に見えるこの世の現実についても、ある覚醒をもたらす。この論点は、すでに『心理学原理』（初版一八九〇年）にも見て取れる。「文明化された生活のなかで、多くの人々は心が張り裂けるような本当の恐怖を経験することのないまま、揺りかごから墓場へと運ばれていく。精神的な病に襲われないかぎり、われわれの多くが恐怖という言葉の意味を知ることはないのである」。

この論点は、およそ十年を経た『諸相』においても保持されている。「精神病者の見る恐怖の幻影は、すべて日常の事実を材料にして作られている」。「興奮した憂鬱症患者の感じる、あの死のような恐怖」は、われわれが目をふさいでいるこの世の現実の過酷さに対する、鋭い反応なのである。

ここで語られている病者たちは、二重の意味で病んでいることに注目したい。すなわち、彼らは前述のA、B双方の意味で病んでいるのである。

なお、この種の病苦はジェイムズにとって、決して他人事ではなかった。彼は『諸相』のなかに、あるフランス人の憂鬱症患者の手記という形で、密かに自分自身の経験を記している。「哲学的な厭世主義」に陥り、「将来の見通しについてすっかり気持ちが陰鬱になっていた頃のある夕方」、薄暗がりの衣裳部屋で、〈私〉は突然、「私自身の存在に対する身の毛もよだつような恐怖心」に襲われる。その時、かつて保養所でみたことのある癲癇病患者の姿が心に浮かんできた。膝を立てて顎を乗せ、「彫刻のエジプト猫か、ペルー人のミイラのように」座っていた。黒い眼だけが動いていて、「まったく人間とは見えなかった」。そのとき〈私〉は思った。「あの姿が私なのだ」、と。それはまるで、「啓示」のような経験だった。以来、〈私〉は、「他人の病的な感情に共感できるようになった」と言う。

3　二階建ての宇宙

以上、ある種の病的気質が一方では知覚可能な世界の「向こう側」への覚醒を促すとともに、他方では目に見えるこの世の悲惨への覚醒をも促す点にジェイムズが注目していたこと、また、ジェイムズが自ら病む経験を通して、特に二重の意味で病む人――医学的に病んでおり、しかも、その病が「病める魂」の持ち主ならではの苦しみでもある人々――の視座への共感を深めていたことを確認した。

もっとも、ジェイムズは超越主義やニューソートといった当時のアメリカの「健やかな心の宗教」の興隆を、ことさらに軽んじるのではない。それらが人間の自然な宗教的能力の発露を促す点で、人間本性にあまりに悲観的な目を向ける伝統キリスト教を凌ぐ成果をもたらしてきたことを積極的に評価してもいる。

しかしながら、知覚の「向こう側」への覚醒が、苦や悪に満ちたこの世の現実への覚醒を犠牲にせずに成立する事態にこそ、ジェイムズは十全に深められた霊的覚醒のかたちを見ている。そこには、宗教的人間が理想と見なす彼方の「見えない秩序」と、目に見えるこの世の秩序との埋めがたい懸隔を直視する姿勢がある。この懸隔の認識は、「病める魂」の典型としてジェイムズが挙げるトルストイやバニヤンがそうであったように、その深められた霊的覚醒の果実のうちに、いくばくかの苦味を残すことになる。「バニヤンもトルストイも、われわれが「健やかな心」と呼んだようなものにはなれなかった。（中略）彼らの贖いは二階建ての宇宙へ入っていくことだった。二人はそれぞれの悲しみの鋭い刃先を鈍らせるような善の存在を悟った。けれどもその悲しみは、それを克服した信仰の心の中に一つの小さな要素として保存されていたのである」。

4　「正気」をもたらす信仰

バニヤンやトルストイの病と同様、ジェイムズ自身の病もまた、生涯、完全に癒されることはなかったようだ。しかしながら、そのような癒しの不全こそが、自らに与えられた人生の限界をはるかに越えて、世界全体の状態を少しずつ改善していくという長大なプロジェクト（彼

の言う「世界の救済」への希望を切実なものとしていることもまた、事実である。そのようなプロジェクトの背後に、ジェイムズは最終的に「神」の意図を見ている。これが彼自身の「過剰信念」の領域に属するものであることは言うまでもない。

注目すべきは、彼が自らの過剰信念に対して「自分なりの尺度において忠実であること」によって、自分が「より正気で真実な状態でいられるような気がする」、と述べていることである。霊的覚醒を経て基礎づけられる信仰、また、その信仰を土台とする諸々の行動に、ジェイムズは病の消滅よりもむしろ、病を抱えつつも正気を保つことを可能にするような働きを認めたのではなかったか。バニヤンやトルストイにおける信仰と人生が典型的な事例となっているように、である。広義の宗教の存在意義がしばしば「癒し」との兼ね合いで論じられる今、心の健やかさとは、あるいは正気とは何か、といった問い直しの必要性も含めて、ジェイムズの著作にはなお見直されるべき洞察が含まれているように思う。